

高血圧心と肥大型心筋症の心筋間質線維化の定性的・定量的対比検討および心機能に及ぼす影響の検討

著者	杉原 範彦
著者別表示	Sugihara Norihiko
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成2年7月
ページ	56
発行年	1990-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14807

学位授与番号	医博乙第 1053 号
学位授与年月日	平成元年 5 月 17 日
氏 名	杉 原 範 彦
学位論文題目	高血圧心と肥大型心筋症の心筋間質線維化の定性的・定量的対比検討および心機能に及ぼす影響の検討
論文審査委員	主 査 竹 田 亮 祐 副 査 服 部 信 岩 喬

内容の要旨および審査の結果の要旨

高血圧心と肥大型心筋症の心筋間質線維化の量的、質的相違、後負荷の線維化増加に及ぼす影響、および線維化増加の心機能に及ぼす影響を検討するために、対照群、本態性高血圧症群、肥大型心筋症群を対象に心内膜心筋生検標本の心筋間質線維化の定性的、定量的な評価を行い、さらに心臓カテーテル検査で得られた後負荷・心機能諸指標との関係について検討した。【対象】胸痛などの心愁訴の精査目的で当科に入院し、心臓カテーテル検査を含む心精査によっても明らかかな異常を認めなかった血圧正常の対照群11名、本態性高血圧症患者25名および肥大型心筋症患者19名を対象とした。【方法】心臓カテーテル検査より心係数、全身末梢血管抵抗係数、左室駆出率、左室後壁厚、心室中隔厚を求めた。心内膜心筋生検法より心筋間質線維化を定量的に求めた。更に線維化をAndersonらの分類に従い4型に分類し、それぞれの占める割合を定量的に求めた。得られた成績は次のごとくである。1) 高血圧群と肥大型心筋症群の総%線維化は血圧正常の対照群に比し有意に増加していたが2群間では有意差を認めなかった。高血圧群は対照群に比しinterfiber typeの線維化が有意に増加しており、肥大型心筋症群では対照群に比しplexiform typeの線維化が有意に増加していた。2) 高血圧群、肥大型心筋症群いずれの群においても左室と右室心筋生検標本より求めた総%線維化の間に有意な正相関が認められた。3) 心筋生検標本より求めた総%線維化と収縮期大動脈圧、全身末梢血管抵抗係数、左室駆出率、心係数、左室拡張末期圧との関係を検討したが、いずれの群においても有意な相関関係は認められなかった。本態性高血圧症と肥大型心筋症では心筋間質線維化が対照に比し有意に増加しその量は同程度であったが、線維化の型は明らかに異なっていると結論された。また本態性高血圧症群で間質線維化と後負荷との間には有意な関係は認められず、本症における間質線維化増加は単に後負荷増大のためだけでなく、その他の因子の影響が加わっていると考えられた。本態性高血圧症群、肥大型心筋群の左室機能と心筋間質線維化の間には有意な関係を認めず、左室駆出率や心係数は間質%線維化が20-30%に増加した程度ではそれにより直接的障害を蒙らないことが示唆され、また肥大型心筋症の左室拡張末期圧の明らかな上昇にも直接的には関与していないと考えられた。

本論文は、高血圧性肥大心と肥大型心筋症における心筋間質線維化の特徴を示し、右室心筋生検所見のもつ意義および心機能指標との関連を明確にした点、心肥大の研究に資するところがあると評価される。